計量経済学 増補改訂版

辻村江太郎

NHKブックス

331

辻村江太郎（つじむら・こうたろう）
１９２４年　東京都に生まれる
１９４８年　慶応義塾大学経済学部卒業
現　　在　慶応義塾大学教授
専　　攻　計量経済学
主なる著訳書　「景気変動と就業構造」(共著)「消費者行動の理論」「消費構造と物価」『日本経済の一般均衡分析」（共著)「経済政策論」

NHKブックス 331　　検印廃止

計量経済学　<増補改訂版>

昭和53年11月20日　第1刷発行

著　者　辻村江太郎
発行者　藤根井和夫
印刷　壮光舎
製本　田中製本
装幀　栃折久美子
発行所　日本放送出版協会
東京都渋谷区宇田川町41—1
〒150　振替東京　1-49701

落丁本・乱丁本はお取替いたします

計量経済学

増補改訂版

辻村江太郎

NHKブックス

331

© 1978 Kōtarō Tsujimura

はしがき

ちかごろ、放送や新聞記事に――とくに政府の経済計画に関連して――計量経済学的手法とか、計量経済学的モデルとかいう言葉がしばしば現われます。

計量経済学（エコノメトリックス） econometrics とは何かを簡単に説明するには（国際）計量経済学会（エコノメトリック・ソサエティ）の規約第一条をそのまま引用するのがいちばんよいでしょう。

「計量経済学会は、統計学および数学との関連において、経済理論の進歩をはかるための国際学会である。本学会は、政治的、社会的、金銭的、ないし国家主義的な偏りを排除し、利害関係から完全に切り離された、科学のための団体として活動する。その主要な目標は、経済の諸問題に対する理論的―数量的接近と経験的―数量的接近とを統一するための研究を促進することにある。この目的を達するには、各種の自然科学において支配的となっているような、構成力のある厳密な思考によらなくてはならない。このような、経済学における理論的研究と実証研究の一体化を、究極的に推進することを約束するものであれば、いかなる研究活動も本学会の関心の範囲に入るであろう」

計量経済学会が創立されたのは一九三〇年一二月二九日ですから、他の学会に比べれば、若い学会です。わが国でも、戦前から、理論経済学ならびに統計学を専攻された、少数ながら優れた諸先達が、計量経済学の研究ならびに普及に努力され、それが戦後の若い世代に引き継がれて、今日では独創的な研究成果が多く発表され、世界でも有数な計量経済学者保有国になっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ています。

しかし、現在でも、本格的な計量経済学の研究ならびに教育を行なっている大学は少数ですから、経済関係の学部の卒業生でも、多くは、計量経済学に馴染がないのが実情です。ところが、計量経済学の基礎研究の進展と、統計資料の整備と、電子計算機の発達とによって、計量経済学の研究成果を実地に応用することは思いのほか急速に普及しました。

現代の経済機構が巨大かつ複雑となり、あわせて、民主主義の確立によって、独断的な経済の運営がむずかしくなったために、計量経済学的手法に頼らざるをえないような客観情勢になっているからでしょう。

このように、実用が教育を追い越してしまったため、十分な説明も受けないで、半信半疑のまま計量経済学的手法に追い立てられるような感じをもつ人が、少なくないのも無理のないことです。それで無用の論争や誤解を生むおそれも少なくありません。

最近では、計量経済学の教科書や参考書がかなり出ていますが、それらの大部分は元来、この学課を専攻する学生や研究者のためのもので、計量経済学を専門的に身に付けようとするならば、それらの書物を、しっかりした指導のもとで読み、また一定年限の訓練を受けなければ十分とはいえません。それは、二、三冊の医学書をしろうと読みしても、医師として通用しないのと同じことです。

けれども、作曲や楽器の演奏ができなくても、音楽は観賞できますし、優れた芸術は見分けられます。それと同様に、実地に応用された計量経済学的手法の意味や信頼度は、少しの予備

知識があれば理解できるはずです。また計量経済学的手法を使う側としても、そこまでは説明する義務があります。つまり、教養としての、計量経済学に関する知識は、専門的知識とは別の重要な意義と必要性をもっています。

経済問題は私達の健康の問題と同じに、日々の生活を左右します。心臓や胃がどこにあるか知らない患者がいたとしたら、自覚症状を訴えるのにも困るでしょうし、お医者さんの説明も理解できないでしょう。「健康にして文化的な生活」を実現する権利を護るためには、私達をとりまく経済情勢がどうなっているのか、政府の行なおうとする政策がどんな意味をもっているのかを的確に理解する必要があります。また疑問があるときは、的確な質問ができなければなりません。この本が計量経済学の理解を通じて、そのようなことのお役に立つことを願っています。

NHKの番組への出演をきっかけに、この本の初版を書いたのは、もう一〇年以上も前になります。これまで予想外に多くの方々に読んで頂けて幸せに思っています。あの頃から現在までに日本の実質GNPは二倍にも増え、国際環境も大きく変りました。また著者の知識も少しは進歩したのではないかということで、必要と思われる箇所を改訂したり、追加したりしました。内容の本筋は変っていません。

おわりにこの本の編集担当者の入部皓次郎氏に、厚くお礼を申したいと思います。

昭和五三年一〇月

辻村江太郎

目　次

序章　計量経済学の登場……9

I章　自由経済と経済政策……21

市場機能とその限界(一)22　市場機能とその限界(二)28　欠陥に対処する政府の役割33　自然治癒のきかない現代経済36

II章　経済計画の数量化……45

はじめに46　日本経済の環境条件47　国際市場と国内経済53　成長か分配か56　政策は数字で示さねばならない63　計量経済学の役割69

III章　計量モデルと経済政策……75

経済実験のできる計量経済学76　計量経済学モデルの骨子79　経済のしくみと政策の効果84　モデルの記号化90　「モデルの実証性」94　も

ちつもたれつの経済諸量(一)97　もちつもたれつの経済諸量(二)101　政策変数106

Ⅳ章　産業連関モデル……111

はじめに112　産業連関モデルの構成118　産業連関の網目の具体的表現125　産業連関表130

Ⅴ章　数量と価格……139

定量モデルと政策140　経験科学としての計量経済学145　モデル体系の締めくくり151　生産要素の投入と最終需要の配分158　緊密な経済諸量の結びつき166　構造式の現実性172

Ⅵ章　基礎理論の構成手順……179

所得と消費需要180　時系列資料と家計調査資料186　経済関係式の自律性191　計量経済学の予測は条件付き197　消費者としての「家計」203　消費と家族構成208　精度の高い予測のために215　費目別消費支出の相互依存関係219　消費需要関数の体系224　多部門モデルの実例232

Ⅶ章　実験不能の問題と経済測定……237
付録　新中期マクロ・モデル
　　ＫＥＯ一般均衡型モデルⅠ
索引（巻末）

序章　計量経済学の登場

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに、なぜ「計量経済学（エコノメトリックス）」という名前があるのかを考えておきましょう。「物理学」ではとりたてて「計量物理学」などという名前を使わないからです。これには、二つの理由があります。

一つは、物理学が古くから天体観測や実験室での計量測定を基礎として、その上に理論が築かれたのに対して、経済現象については観測資料の整備が遅れたために、あとになって計量測定の分野が発達したからです。似たような事情から、「計量心理学（サイコメトリイ）」とか「生物測定学（バイオメトリックス）」というような名前が使われています。

この意味に使われる時には、計量経済学は経済測定法（エコノメトリック・メソッド）を指すことになります。あとで述べるように、経済現象については、物理学や化学、生物学などでのような実験ができないので、測定すること自体が個有の問題をはらみます。それで、とくに経済測定の統計学的な側面を扱う分野として計量経済学（エコノメトリックス）という名が使われることも多いのです。

けれども、もっと重要な理由として、経済学発展の歴史的背景を考えない訳にはいきません。これは経済学に個有な問題で、物理学はもとより、生物学や心理学では、ほとんど全く問題にならないことです。

経済学というと、自由主義経済学ないしは近代経済学と、マルクス経済学と、二種類の経済学があるというのが常識になっています。マルクス経済学者は、近代経済学のことをブルジョア経済学と呼んだりします。この二つの経済学は、国の経済体制の選択とからんでおり、近代経済学は自由経済体制に、マルクス経済学は共産主義体制に、それぞれ結び付けられてきま

した。

しかし、おかしなことに、マルクス経済学は自由経済体制を否定しますけれども、共産主義体制の下での経済運営の在り方について、詳細かつ的確な処方箋を与えるようには、できていません。これはマルクス経済学の本を読んでみれば分かることです。

同じように奇妙なのは、近代経済学、もっと正確にいえば、イギリス古典派経済学、それの近代版とされている新古典派経済学です。これを特徴付けるのは「**自由放任**（レッセ・フェール）」の主張ですが、古典派いらいの自由放任の主張は、政府は何もするな、一般の消費者や生産者にしたいようにさせておけ、ということです。何もするなというからには、経済政策の在るべき姿について指示する必要はない訳で、政府は何もすべきでない、ということを証明した瞬間に経済学の使命は終るわけです。こんなおかしな学問がほかにあるでしょうか。

もちろん、現在の近代経済学はケインズ理論をとり入れ、景気調整のための総需要管理政策として、財政・金融政策の意義を積極的に認めています。しかし、それ以外の部面については、伝統的な自由放任の主張が根強く残っています。

それで、いわゆる近代経済学とマルクス経済学は、倶（とも）に天を戴（いただ）かない（不具戴天）仇敵（かたき）どうしのようにして共存してきたのです。

何でこんなことになったのでしょうか。

長いあいだ古典派経済学的な**自由放任**の主張の元祖はアダム・スミスであると信じられてき

ました。けれども、スミスの『道徳感情論』や『国富論』(『諸国民の富』)をよく読むと、スミスの自由放任の主張と、その最大の後継者といわれるリカードウ以降の古典派の主張とは、意味がかなりちがう、場合によっては正反対である、ことが分かります。

スミスが自由放任といったのは、一八世紀以前に、国王などに代表される政治権力と一部の民間業者とが結托して、市場を独占し、暴利をむさぼるケースが多かったのに対して、政治権力は経済から手を引け、と叫んだのでした。今日でも、政治権力が民間業者と結托すると、ろくな事が起きないのは、みなさん御承知のとおりです。主権在民を建前とする現代でさえ、そうなのですから、スミスの当時までには、腹にすえかねるようなことが多かったにちがいありません。

スミスが主張したのは、「徒弟条令」とか「定住地法」とか、職業選択の自由や居住地選択の自由を制限するような悪法を撤廃することだったのです。スミスは『国富論』に先立つ『道徳感情論』で人間の性情を分析しましたが、どう見ても、お人好しより悪賢い人間のほうが得をする、という傾向の強いことを観察し、善良であるか否かが現世で報いられないで、来世でしかものをいわないことを残念がっています。この難問に対するスミス自身の解決案が、『国富論』における自由競争市場のイメージだったと思われます。

今日のわれわれの生活でも、たとえば、友人と一緒に入学試験を受けて自分だけ合格したとき、友人が落ちた悲しみよりも自分が受かった喜びのほうが大きいのがふつうで、まして親は自分の子のことだけで頭が一杯で、よそさまのことまで考えられないとしても、特に悪人だと

いうことにはならないでしょう。

人間は利己心よりも博愛心の強い、あたたかい心の持主だと信じたいけれども、現実はその反対だということを認めざるを得ない、というクールな認識をはじめて明言したのがアダム・スミスです。けれども、彼は利己心を讃美したのでは決してなかったのです。意にそまない現実を認めて、禍を転じて福となす妙案はないか、と懸命に考えた末に発明（発見？）されたのが、彼の**自由競争市場**だったのです。

より良い品物をより安く売る店があれば、そこで買う、という買手の自由が保証されていれば、暴利をむさぼろうとする売手は他に顧客をとられてしまい、元も子もなくなる。お金を儲けようとすれば、まず買手が集まってくるように、他店（よそ）より良い物をより安く売らねばならない。それで、儲けたいという売手の利己心にもとづいた行動が、結果的には消費者の利益に結び付く。そのためには、誰でも、何を作り、何を売り、どんな値段を付けるか、を自由に選択できるようにして、相互に競争させなければならない。

スミスの**自由競争市場**というのは、私的利益追求という強烈なエネルギーを、社会全体の公的利益増進に役立てるための、一種のエネルギー変換装置だった訳です。その意味では、スミスの若い友人だったジェームス・ワットの蒸気機関（スチーム・エンジン）と似ています。下手に扱えば水蒸気爆発を起こしかねないエネルギーを使って、役に立つ仕事をさせるのがスチーム・エンジンだからです。現代のガソリン・エンジンも同様です。

競争市場が成り立つためには、誰でも自由に売ったり買ったりする自由が保証されていなけ

ればなりません。そのことを一般化して、無制限な**自由放任**を主張したのが、リカードウでした。これから、いわゆる**契約自由の原則**が導かれます。

リカードウにいわせると、労働市場で、労働者が低賃金で働く契約をするのも、その労働者の自由だから、政府はそれに干渉すべきではない、ということになります。「放って置けば、すべてうまくいく」というのがリカードウ的な自由放任で、この伝統は現代まで根強く残っています。

リカードウの主張を、そのまま鵜呑みにして繰り返していた古典派経済学者たちに対して、怒りを爆発させたのがマルクスです。マルクスは一九世紀前半の低賃金・長時間労働という、目にあまる劣悪な労働条件の上に企業の繁栄をもたらしているのが自由競争市場であるのなら、そんなものは無いほうがよい、と考えたのでした。

けれども、スミスはリカードウのように「放って置けば、すべてうまくいく」と考えていた訳ではなかったのです。とくに労働市場については、親方は職人が雇えなくてもすぐに生活が脅かされることはないけれども、職人たちは一週間も仕事がなければ餓死の危険に曝される。そのために、雇用契約はけっきょくのところ親方たちのいいなりになってしまう、ことをよく知っていたのです。それなのに「政府は、賃金が低くなりすぎることを規制しないで賃金が高くなりすぎるほうばかり心配した法律をつくる」とか、「職人たちの団結を禁じておきながら、親方たちの団結は野放しにしている」とかと憤慨していたのです。また、業者たちは懇親会と称して集まっても、すぐに商品値上げの陰謀をたくらむものである、ことをスミスは指摘して

います。

ですから、アダム・スミスは、**自由競争市場**というエンジンが彼の期待どおりに運転されるためには、それなりの条件整備が必要だと、むしろ思っていたのであり、今日でいえば、労働団結権の保証だとか、労働基準法だとか、独占禁止法だとかいうものの意義を積極的に評価する立場だったのです。

それなのに、一九世紀以降、リカードウ的「放って置け」主義の**自由放任**の主張が支配的だったのは、何でも勝手にやってよろしい、というほうが経済的強者にとっては都合がよかった、という俗悪な理由ばかりではないでしょう。例外規定のない一般的な断定のほうが簡単明瞭で分かりやすい、という理論構成上の誘惑が強かった、という点も見逃せません。

マルクスは、現代の労働基準法の前身である、当時のイギリス「工場法」のようなものが厳格に適用されれば、市場メカニズムの弊害をとり除くことができることを知っていました。しかし、政治権力が資本家の利益を代辯するような社会で、まともな法的規制など期待できない、と考えたのでした。だから、自由市場体制そのものを否定する道を選んだのです。ですから、それ以後のマルクス経済学は、リカードウ的な経済学の描いて見せる資本主義経済の有効性を、否認することに終始したといえます。そのために、自由経済体制を否定して共産主義体制を選んだ後に、市場を持たない中央計画経済体制を運営するための指針は、マルクス経済学からは出て来ません。

リカードウ的な自由資本主義体制の下では、その体制を堅持するかぎり、あとは放って置け

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com